

まえがき

社会主義の経済構造論や経済メカニズム論を現実の経済に適用しようとする場合、経済成長循環論を通してはじめてそれが可能になるように思われる。あらゆる経済現象は循環のなかで位置づけられ、その規定を受けてはじめて正確な意味をもちうる。

この意味では成長循環論は、最も包括的な経済カテゴリーに属するいわば、社会・経済的過程の総括形態である。

しかしながら、この領域はわが国では大変限られた人たちの間で研究されてきたし、それもまだ充分とはいえない。むしろ残された課題のほうが多いといえる。

諸外国の状況を見ても、この事情はわが国の場合とあまり変わらない。研究の精粗に関しては国によって大きな差がある。のみならず、成長循環という問題提起すらされていない国もあるほどである。ソ連の場合がそうである。しかしながら、ゴルバチョフの情報公開（グラスノスチ）政策によって、経常的経済政策が批判の対象となるようになってからは、成長循環という問題提起がなされないまま、経済分析が自然と循環論の領域に踏み込みつつあるように思われる。恐らくこのような事情はソ連以外の保守的であった国ぐに、東ドイツ、ブルガリア、ルーマニアにも波及していくであろう。この意味では経済研究は一段と精密なものとなっていく。最近のソ連・東欧における政治的改革は真に歓迎すべき出来事である。

本書では、成長循環の基礎理論、およびその総括形態としてのコメコン循環、次にソビエト、ハンガリー、ポーランド、ブルガリアの各国民的循環が述べられている。

こうした広い領域を論ずるにあたって、個々の具体的な問題について統一的な見解を期待するのは無理である。第1にそれぞれの筆者の立場は、その

よって立つ国の循環論の影響を受けているからである。

第2に、成長循環を前述の社会・経済的過程の総括形態であるとするれば、これに対する接近方法が各人によって相違の生ずることもやむをえない。

こうした理由で本書の各論文にはアプローチに若干の差がある。しかし、私には、こうした差があることによって、人はより多くを考えさせられるのではないかと思っている。

本書は1988年度のアジア経済研究所地域研究部研究プロジェクト“コメコン成長循環”の研究結果をまとめたものである。

なお本研究プロジェクトでは、本書の他に次のような研究成果をすでに発表している。あわせて参照くだされば幸甚である。

名島修三「ソ連における経済成長テンポと均衡」(『アジア経済』第30巻第6号, 1989年6月)

G・W・コウォトコ(田口雅弘訳)「社会主義における経済成長循環」(『アジア経済』第30巻第7号, 1989年7月)

『コメコン諸国における成長循環分析の動向』(アジア経済研究所, 所内資料 地域研究部No.63-1 東欧諸国基礎資料シリーズNo.7, 1989年)

1990年1月20日

名島 修三